

今年度もたくさんの質問が寄せられました

郷土館では、活動の一つとして本町に関わるさまざまな疑問や質問を「学習相談」として年間100件ほど受け付けています。今年もいろいろな質問が寄せられましたが、特に興味深かった質問をご紹介します。



演技の打ち合わせをする高倉健さん
(現在の国道391号線の塘路付近)

昭和33年、映画「森と湖のまつり」の撮影が、主に萩野と塘路で行われました。質問者はそのロケ期間中に、主演の高倉健さんと敵役の三國連太郎さん、そして映画には参加してない仲代達矢さんを塘路付近で車に乗せて、標茶の駅前旅館に連れて行ったという一般の方で、その駅前旅館の名前を知りたいというものでした。程なくしてその旅館は「テレーノ気仙」の前身である「気仙旅館」だったことが判明しました。

撮影に参加してない仲代さんが標茶に来て、高倉さんと三國さんと共に芝居談義したとなればとても面白い話です。仲代さんは当時、映画「サザエさん」の“のりすけ”役などで知られるようになった若手俳優で、この年公開した「乾杯！見合結婚」という映画で「森と湖のまつり」のヒロイン香川京子さんと共演していました。仲代さんは映画会社と契約しないフリーランスの役者だったので、同業仲間へ激励に来たというのも想像できなくはありません。

大川のほとり

—郷土館だより(第69号)—
☎487-2332
開館時間
午前9時30分～午後4時30分

郷土館より
一筆啓上

今回で釧路集治監人物伝は最終回となります。平成14年に四人たちの話から始めた人物伝は、偶然にも14年目を迎えて終了します。町民の皆さんからいろいろな声をかけていただき、ありがとうございました。(坪)



有馬四郎助(左)と留岡幸助(右)

大正11年撮影

【人物叢書 有馬四郎助】より引用

留岡幸助は、真宗大谷派(＝東本願寺)の僧侶が教誨師として在籍しており、この動きに反発します。この問題はその後大きくなり、政府と本願寺との問題にまで発展し、帝国議会に取り上げられるほど波及しました。本来、教誨師の任命権は典獄側にあり、四郎助の行動に問題はなかったのですが、問題の沈黙化を図るため政府側が折れ、四郎助は市ヶ谷監獄へ転任させられました。

四郎助は着任早々、内務省から非公式に、教誨制度の変革と対策を求められました。当時、諸外国との不平等条約改正を考えていた政府は、条約改正を行う前提として、日本が欧米と同等の国であることを発信する必要がありました。そのため、国内のさまざまな法律や条例などを欧米式に改めており、教誨制度に関しても信教の自由を取り入れようと考えました。また、当時の監獄教誨師は東西本願寺の僧侶が独占していたため、大きな力を持っていた寺院の力を削ぎ、別な宗派の教誨師を導入する意思もあつたようです。四郎助は政府の考えをくみ取ったうえで、キリスト教の牧師であり盟友の留岡幸助を巢鴨監獄へ迎えるべく、浅草本願寺へ赴き申し入れました。四郎助の管理する巢鴨監獄には、真宗大谷派(＝東本願寺)の僧侶が教誨師として在籍しており、この動きに反発します。この問題はその後大きくなり、政府と本願寺との問題にまで発展し、帝国議会に取り上げられるほど波及しました。本来、教誨師の任命権は典獄側にあり、四郎助の行動に問題はなかったのですが、問題の沈黙化を図るため政府側が折れ、四郎助は市ヶ谷監獄へ転任させられました。



釧路集治監人物伝 最終話 後編

釧路集治監看守長 愛の典獄 有馬四郎助

しらすけ

標茶から消えてしまった生き物たち

“屋根のない博物館”とも呼ばれ、豊かな自然環境とさまざまな動植物が生息する本町。しかし、かつて本町で目撃情報が記録されながら、現在は絶滅してしまった動物も数多くいます。本町の絶滅種を証言と共にご紹介いたします。

「エゾオオカミ」

(蝦夷狼：北海道およびサハリンに生息。北海道では明治30年代に絶滅)

道内の絶滅種として知られるエゾオオカミは、頭から尾までを含めると150～160cmにもなり、大型犬とほぼ同じ大きさです。明治初期までは道内各地にいましたが、食糧であるエゾシカの乱獲や雪害などによる減少に加えて、家畜被害対策として毒餌による駆除が行われたことなどで、明治30年代初頭には絶滅したとされています。

本町での目撃証言として「オオカミは徐々にいなくなったのではなく、一気にいなくなった。原因はシカを追いかけて川で溺れたから」との話が残されています。全道的にも短期間で絶滅してしまったことが記録されており、本町の証言と一致しています。通常、オオカミが川に入ったシカを泳いでまで追跡することは、体力の消耗から考えてあまりありません。溺れる状態になるまで必死に追いかけたとすれば、餌となるシカがかなり減っていたとも考えられます。また、オオカミも空腹のため、弱っていたともいえるでしょう。

エゾオオカミが絶滅した頃、本町はまだ開村したばかりの新興村でした。大きな牧場も無かったことから、被害記録も残っていません。本町にいたエゾオオカミの脅威を最も肌で感じたのは、集治監から脱走し、釧路を目指して森の中を逃げた、囚人たちだったかもしれません。



エゾオオカミのはく製
(所蔵および写真提供：北海道大学植物園・博物館)

四郎助の後半生は、標茶や網走での前半生から一変しています。「愛の典獄」「耶蘇典獄」とも呼ばれた四郎助は、囚人も一人の人間として向き合った後半生の実践によるものです。しかしその源流は、若き日の四郎助が標茶で大井上輝前や原胤明と出会い、囚人への愛と更生保護に触れたことにありました。四郎助が残した幼年保護会は、現在も四郎助の孫によって続けられており、多くの少年少女を助けています。

四郎助は脳出血により亡くなりました。偶然にも、盟友だった留岡幸助もまた、四郎助死去の翌5日に息を引き取ります。葬儀は四郎助の創設した幼年保護会と、留岡の創設した家庭学校との合同葬として行われました。多くの釈放者らも含め、1300人が参列したと伝えられています。



退官後の有馬四郎助
昭和6年撮影
『人物叢書 有馬四郎助』より引用

四郎助は昭和4年に刑務官(典獄から名称変更)を退官しました。標茶から始まって43年間、すでに65歳となっていました。四郎助は幼年保護会を経営しつつも第一線の刑務官として職務を全うし、退官後には特旨にて正四位を授かりました。それから5年後の昭和9年2月4日、四

明治32年、横浜に新築した神奈川県監獄の典獄として着任した四郎助は、監獄事業への理解を深めるため、講演を実施したり「監獄デー」を設けて牧師を呼び、監獄にちなんだ説教をしたり、礼拝献金を釈放者保護の寄付金として活用するなどの運動を始めます。四郎助の典獄以外の社会活動で最も知られているのは、明治39年に横浜で「小田原幼年保護会」を立ち上げたことです。四郎助は少年犯罪の原因として、その境遇による影響が極めて大きいことを知っており、彼らを再犯から救うには刑務所の処遇と同時に、出所後の指導が非常に重要であると痛感していました。幼年保護会は、出所した少年少女の保護および教育施設で、四郎助個人が立ち上げた民間の社会事業施設です。この頃、成人釈放者を対象とした保護団体(現在の更生保護団体)は全国に70カ所近くありましたが、少年少女を対象とした保護団体は「小田原幼年保護会」が最初でした。四郎助は典獄職の傍ら、施設経営の寄付を募るため、さまざまな所へ出かけて協力を呼びかけ、施設をどんどん拡充していきました。幼年保護会は男女別に分けられ、少女たちの教育と就労を支援する「家庭学園」と、少年たちの保護を目的とする「力行舎」が設立され、多くの少年少女の更生の助けとなりました。この活動には北海道遠軽町で「北海道家庭学校」を立ち上げていた留岡幸助も大きく影響を与えていました。急速な施設の拡充から、それだけ必要とされていた施設であったことがうかがえます。

(完)